NEWSLETTER

No.10

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会　会報　第10号

(2011年2月)

内容

JICA九州国際センター所長あいさつ（村岡　敬一）…… 1
福岡県JICA派遣専門家連絡会の現状（久保倉　宏一）…… 2
日本語能力検定試験（パラグアイ）（児玉　憲雄）…… 5
平成22年度JICA鹿児島パネル展（力竹　貴子）…… 6
平成22年度会員活動報告
　2010年インドネシア・メラピ火山への国際緊急援助隊派遣（井口　正人）…… 8
　ザンビア国立ノーザン職業訓練大学校（稲見　廣政）…… 9
平成22年度「連絡会」活動報告…… 11
平成21年度「連絡会」総会及び講演会報告…… 12
シニア海外ボランティア　日系社会シニア・ボランティア募集…… 19
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項 …… 20

JICA九州国際センター所長あいさつ

村岡　敬一

皆様、こんにちは。
独立行政法人国際協力機構九州国際センター所長の村岡敬一です。
昨年４月に所長の任を拝命し、着任いたしました。

九州での勤務は初めてですが、22年前に当センターの設立にかかわりました。開所式の記念に植えた若木がいまや大木に育っているのをみるにつけ、この間、当センターと九州各地の皆様との関係が若木の成長をなぞるように、より成熟した関係となってきていることを大変うれしく思っています。

さて、機構を取巻く国内外の環境につきましては、昨年12月24日に閣議決定された23年度予算政府原案では技術協力関連の運営費交付金が前年度比マイナス1.6％の1457.8億円、JICAが実施の一部を担う無償資金協力関連予算がマイナス1.5％の1591億円となっており、6.6％増、9500億円の事業規模が見込まれる有償資金協力勘定とあわせると全体で１兆1000億円を超える事業規模が確保される見通しです。他方、行政刷新会議による一連の事業仕分けにおいては、機構業務の意義や目的については理解をいただいたものの、業務の効率的運営や説明責任の重要性が指摘され、現在、見直すべきところは見直し、改めるべきところは改める作業に組織を挙げて取組んでいるところです。

こうした予算のプロセスと並行して昨年６月に外務省より発表された「ODAのあり方に関する検討」では、国民の理解と支持のもと、引き続き戦略的効果的な途上国支援を行う実施機関として機構の強化が打ち出されました。同検討では、「開かれた国益を増進」するために「世界の人々とともに生き、平和と

繁栄をつくる」との新たな理念を示し、重点分野として①貧困削減（ミレニアム開発目標達成への貢献）②平和への投資③持続的な経済成長の後押しの３つの点に絞り込み、これらの分野へ日本の「人」、「知恵」、「資金」、「技術」を結集した開発協力の方針が提示されました。また開発協力に対する国民の理解と支持の促進のために、JICAに対し多様な関係者の「結節点」としての役割の強化を求め、当センターを含む国内拠点、JICA関係者等をフル活用し、ODA広報、交流・会議のための場所の提供、シンポジウムや研修の実施等に力を入れていくことを提言しています。

海外に目を向けますと、2000年９月の国連ミレニアムサミット開催を契機に「ミレニアム開発目標」が掲げられ、この目標は貧困や飢餓の半減、妊産婦の健康改善や乳幼児の死亡率低下、感染症の防止など８つの項目からなり、援助国側および被援助国側の双方が2015年の目標達成に向け取組んでおり、昨年９月にニューヨークで開催されたミレニアム開発目標国連首脳会合には、世界約140ヶ国が参加し、達成状況の中間レビューが行われました。達成状況は目標と地域によって大きなばらつきがあることが確認されるとともに、我が国は菅直人首相が保健・教育分野で今後５年間に85億ドルの支援を表明し、残りの５年間、各国があらゆる手段を尽し目標達成に向け取組んでいくこととなりました。

このように国際協力の重要性は増す一方で、JICAとしては国内の厳しい経済状況の中、より効果的効率的な事業運営を目指しています。国内における国際協力の最前線である九州国際センターは、九州における「結節点」としての役割の強化に向けて、鹿児島の皆様方からの理解と支持を得つつ、九州ならではの特徴ある研修事業や市民参加協力事業を推進し、開発への貢献に取組んでいく所存ですので引き続きご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

福岡県JICA派遣専門家連絡会の現状

福岡県JICA専門家連絡会幹事　久保倉　宏一

１．設立

福岡県JICA派遣専門家連絡会は平成４年（1992年）に立ち上げられ、「わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び福岡県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具現化を期して、本会をここに結集する」の趣旨の下に、「組織としての行動」よりも「個人としての活動」に重きを置き、専門家として派遣された経験を、「語り部」として若い人達や子供達に伝える活動を続けてきました。

年１回の総会・講演会開催と年２回の会報発行などを通して、「語り部」としての経験を共有し、発足以来18年地道に活動を続けてきました。

２．会員数

会員数の年度毎の推移を手元に残る資料から拾い上げると、下表のとおりとなります。

H6	H9	H13	H14	H16	H18	H19	H20	H21
353	347	330	314	296	283	276	270	258

当初会員数は350人を超える大所帯の連絡会でしたが、転勤や転居などの事情により次第に会員数は減少してきました。そこで、平成13年頃はJICA九州より福岡県内の帰国専門家リストなどを入手し新規会員勧誘などを行っていましたが、その後個人情報保護の観点からリストの提供はできないという事由で連絡会からの会員勧誘はストップしてしまいました。現在は、会員の高齢化や転勤などの理由で、会員数が更に減少している

状態です。

3．主な役員

本会の役員は当初、会長と幹事３名（内一人はJICA九州支部長）及び運営委員９名で発足しました。

専門家の所属団体として九州大学が一番多かったため、主として九州大学より会長や幹事が選出されました。運営委員には、次に専門家が多い所属団体である福岡県、福岡市、北九州市、久留米大学、JR九州などから選出をお願いしました。主な役員の変遷は以下のとおりです。

・平成６年４月～平成12年３月
　会長　和田　光史（九州大学）
　幹事　川島　健治郎（九州大学）
　幹事　坂井　純（九州大学）Ｈ６-７
　　吉田　浩之（福岡電気サービス）Ｈ８-11
　幹事　JICA九州支部長
　運営委員　９名

・平成12年４月～平成16年３月
　会長　多田　功（九州大学）
　幹事（会報編集）江頭　和彦（九州大学）
　幹事（活動計画）吉村　健清（産業医科大学）
　幹事（総務）吉田　浩之（福岡電気サービス）
　幹事（会計）久保倉　宏一（福岡市）
　運営委員　６名
　顧問　JICA九州国際センター所長

・平成16年４月～平成20年３月
　会長　江頭　和彦（九州大学）
　幹事　吉村　健清（産業医科大学）
　幹事　久保倉　宏一（福岡市）
　幹事　杉本　孝生（九州産業衛生協会）
　幹事　松尾　弘敏（北九州市水道局）
　運営委員　５名
　顧問　JICA九州国際センター所長

平成12年度より連絡会事務局業務全般が連絡会事務局に移されたため、幹事を実質２名増やすとともに、業務分担を明確にして連絡会活動の活性化を図ってきました。しかし、近年では、各団体からの新たな幹事、運営委員の役員確保が困難となってきてしまいました。

4．主な活動

（1）総会

総会は年度終盤の２月もしくは３月に年１回開催しており、総会議事は、来賓挨拶、活動報告、活動計画などの審議です。

総会には、福岡県や福岡市・北九州市の国際交流団体などの関係者を来賓として招待して、自治体の国際協力への取り組み状況などを紹介して頂いていました。しかし、時間の制約や連絡会活動との直接的関わりが薄いことなどから、平成17年度からは来賓を中止しました。

総会を参加会員にとってより有意義なものとするため、平成13年度から帰国専門家や関係団体よりの活動報告講演会を開始し、毎年２題の講演を企画し意見交換などを行ってきました。これまでの講演内容は下記の通りです。

H13	・エジプト文化圏での仕事の進め方 ・インドネシアにおける地熱開発
H14	・紛争地もしくは治安不穏な地域での活動 ・農学高等教育の国際協力
H15	・フィラリア症の根絶を目指して ・新生JICAの方向性
H16	・NPO九州海外協力協会誕生について ・カリブ地域における防災の現状
H17	・バングラデシュの砒素汚染 ・スロベニアにおける技術協力
H18	・ガーナから聴こえるアフリカのメッセージ ・日中友好環境保全センターの環境国際協力
H19	・海外災害医療支援活動を経験して ・カンボジアにおける森林研究
H20	・新JICAの動き ・南大洋州島嶼諸国の廃棄物処理

対象国や技術協力分野を広く設定して、普段得られないような情報の提供を念頭において講演会を企画してきました。会員だけでなく一般市民にも参加していただきたいという構想もありましたが、これまでのところ実現に至っておりません。会場確保や事前広報などを考えると、他団体との共同開催を考える方が実現可能性が強いと考えます。

総会会場は、当初北九州市のJICA九州センターで行って、総会後の懇親会にはセンター宿泊の

JICA研修生にも参加してもらい、途上国の現況などの情報収集や交流の場としていました。しかし、会員の半数以上が福岡市に在住ということもあるため、最近は福岡市のＪＲ博多駅近郊や中心部天神の会議場で開催しています。

総会参加者は、以前は40名ほどでしたが、最近は20名程度に減少してきていて、全会員数が250名を超えていることを考えると寂しい状況です。

（２）会報

平成10年３月に第１号を発行開始して、平成19年度まで年に２回発行を続けてきました。平成20、21年度は、事情により１回ずつとなりましたが、23号までになりました。

会報印刷は、印刷予算の制約からなるべく安価な印刷所を探して当初はモノクロ版500部印刷から始まりました。その後、平成13年度からカラー版として、約20万円をかけて会報発行を行っていました。会員数が300名近いため、会報の郵送作業が大変でした。

しかし、会報発行も22年度に遂に休止となってしまいました。

（３）地球市民どんたく出展

平成19年度より、国際協力フェスティバル（どんたく）に参加して、連絡会ブースを出展しパネル展示や会報誌配布を行いました。協力隊と較べて知名度が低い専門家の活動を、多くの市民に広報することができたと考えます。また、関連国際協力NGO団体と交流を深めることができ有意義であったと思います。

地球市民どんたくで子供たちに説明する江頭会長

（４）その他活動

平成13年度から連絡会ＨＰを立ち上げて会報情報や派遣・帰国専門家情報などを発信したり、他県連絡会との情報交換を行いました。また、メーリングリストでの会員間情報交換なども試みましたが、次第に縮小してしまいました。

また、各会員が個人活動で行う地域講演やボランティア活動などが多数報告されていましたが、これらを連絡会活動として捉えるかどうかは疑問といえます。

５．福岡県連絡会の現状

会の立ち上げから17年が経過し、この間わが国を巡る国際情勢は大きな変化を見せ、JICA自体、独立行政法人化とJBICとの統合を経て、大きく変貌してきました。加えて、国際協力・支援を標榜する多くの組織も立ち上げられてきました。このような情勢の変化に対応し、会としての活動を維持するべく、会報の発行、種々の講演会への講師派遣などに努め、最近では「地球市民どんたく」への参加など活動の幅を拡げてきました。

しかし、長期的には会の活性の低下と組織の硬直化は否定し難く、福岡県連絡会活動の特色や意義を、対内外的に示すことができませんでした。これには、この10年近くほぼ同じメンバーで、会長・幹事・運営委員を含めた役員を務めてきたことが、一因とも考えられます。そこで、平成20・21年度の会長・幹事・運営委員の交代を行い、新たな方針で福岡県JICA派遣専門家連絡会の運営・活動を行っていきたいと考えたのですが、候補者を確保することができませんでした。これらをふまえて平成19年度総会で、20年度の運営方針について議論しましたが、現状を打開するような具体案には至らず休会も止む無しという状況でした。

しかし、総会・懇親会を通じて活動継続を望む声が依然とありましたので、新期会長・役員不在の状況ですが旧役員等を暫定役員として、規模を縮小しながらでも連絡会活動を継続できる道を探っていくことになりました。

その結果、平成20年度は総会の中止、翌22年度は加えて10年継続してきた会報発行休止や地球市民どんたく出展取り止めとなってしまいました。更に、会長代行の江頭和彦元九大教授が長期専門家として平成23年２月からベトナムに赴任されることになり、会長代行も不在となり専門家連絡会としての体をなさなくなってしまいました。

以上のように連絡会活動の継続ができなくなっ

た理由には色々あると思いますが、情報の収集発信手段の変化が一つ挙げられると思います。20年ほど以前と比較すると、現在は情報入手が非常に容易になり、連絡会を経由しなくとも簡単に情報を発信・入手できます。国際協力団体も多くありますから、自分の関連分野の協力団体に参加して情報収集・発信する機会を得ることも容易です。所属団体や技術分野が異なる帰国専門家連絡会に参加しておく必要が少なくなってきたのだと感じます。

現在、福岡県連絡会は休止状態で、活動再開の道は中々見えないというのが偽らざる現状ですが、活動再開までに温かいご支援をいただければ幸いです。

日本語能力検定試験（パラグアイ）

児玉　憲雄

南米には、日本語能力検定試験なるものがある。毎年12月６日前後に実施される。その内容はともかくも、現地生れの、現地育ちの人たちにとっては、かなり難解である。書きとりはなく、読みだけなのだが、日本育ちの生活者でなければ理解できない慣用句や日常語があり、容易ではない。

私の任地アマンバイは、パラグアイの首都アスンシオンから東北へ550キロの位置にあり、ブラジルと国境を接している。

1992年７月10日の朝、私たちはトヨタのランドクルーザーで出発した。日本人会々長山脇さん、運転の島本さんと共に同乗４人、途中100キロ余りの無舗装の道があるが、この朝は快晴、心配はなかった。その道すがら、会長が言った。実は私どもは先生がおいでになるのを首を長くして待っていました、と前置して、過去10数年、アマンバイからは日本語の試験にほとんど合格できず子どもたちのために残念でならない。先生、助けてください、というものであった。ぼくは子どもたちに正しい日本語を教えるために来たので、そんなつもりはありません、と言ったが、内心やっかいなことになったなあ、と思った。日本語学校で授業を重ね、８月の夏休みの直前、ぼくは街頭で数人の青年たちに呼び止められた。彼らは、ぼくたちにも日本語を教えてください、と迫った。何故勉強したいのか、ときくと、日本語一級の試験に合格すれば、ブラジルで日系企業への就職が容易になるという。特にトヨタなどの一流企業はこれを重視するらしい。

会長の願い、青年たちの訴えに、ぼくの内面で一つの闘志がめらめらと燃え上った。よし、何とかしてやろうと決心した。

着任早々、先ず日本語学校中３の生徒の学力を試した。光村図書の国語の教科書を使って、中学３年の原民喜の「夏の花」を読ませた。この文章は、広島の原爆投下直後の惨状を伝えるもので、かなり難しい漢字の熟語が並ぶ。結果は惨澹たるものであった。すらすらと読むことのできた生徒は一人もいなかった。無事、新鮮、光景などの、小学校の段階までの漢字が読めないことには、全くがっかりした。12月６日の試験までに実質３か月、こうなれば非常手段に訴える以外にない。一晩考えた末５つの方策を立てた。１．教科書の読みを徹底すること、２．成人、青年のための日本語教室を土曜の午後に開くこと、３．先生たちの勉強を毎週水曜の夜開くこと、４．夜間の学習を毎晩７時から９時まで実施すること、５．適切で効果的な学習課題を用意すること。

１については小学校の段階に戻り教科書を徹底的に読ませる。読みができたら、辞典でひかせて漢字の意味を理解させる。単語、句、短文、長文へと学習の習熟度を高めていく。２は土曜の午後１時から４時まで３時間をあてた。３の先生たちの夜の勉強と４の夜間の学習には問題があった。それは夜の外出が危険なことである。日本人会の意見をきいたら、私たちがガードします、是非やって下さい、ということだった。９時に夜の勉強が終ると、門前に子どもたちを迎える車の列ができた。何事ならんと警察や軍隊まできた。ぼくは夜

も昼も学習課題を作り続けた。今や、アマンバイの子どもたち、青年、先生、みんなが、目を輝かせて勉強にとりくんだ。

その成果は驚くべきものであった。１級合格者10名、２級合格者30余名におよんだ。さらに２年目は１級合格者13名となり、２年間に23名の合格者を出した。

この成果にアマンバイの日本人は胸を張り、パラグアイの日本人とJICAは驚き賞賛した。わが事成れり、1994年７月、アマンバイとパラグアイに別れを告げた。

いま、ぼくが鍛え上げた生徒たちが、バイリンガルとして日本の企業で働いている。

平成22年度JICA鹿児島パネル展

JICAデスク鹿児島　国際協力推進員　力竹　貴子

昨年に引き続き、今年もJICA鹿児島パネル展を開催した。

今年は10月２・３日に天文館ぴらもーる通りにおいて、また10月13～19日には山形屋３階連絡通路において、約40枚のパネルを展示した。

今年度の主催はJICA九州となったが、鹿児島県JICA派遣専門家連絡会と青年海外協力隊鹿児島県OB会、JICAデスク鹿児島の各担当が４月より準備を始め、出品者の人選、パネル作成と、昨年のノウハウを活かして進めていくことができた。

また今回は鹿児島県、鹿児島市、鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、鹿児島大学、南日本新聞、南日本放送の後援も得られた。

専門家連絡会からのパネル出品者は以下の通りであった。

市川　敏弘氏・・・マレーシア「マレーシア大学とのプロジェクト」
稲見　廣政氏・・・ザンビア「ノーザン職業訓練技術大学校での活動」
上村　順三氏・・・エジプト「金属加工における総合的品質管理技術の導入」
武若　耕司氏・・・タイ「アジア工科大学院での活動」
馴田　義美氏・・・ブータン「クルタン電気職業訓練校での活動」
野田　伸一氏・・・ケニア「感染症対策プロジェクト」

天文館ぴらもーる通りにおいては、２日間を通して、専門家連絡会、協力隊OB会から約20名のスタッフが会場に貼りつき、活動についての質問やボランティアの応募相談などに対応した。山形屋の展示にはJICA九州の村岡敬一所長も足を運んでくださった。

繁華街や百貨店でのパネル展開催は、普段から国際協力に興味のある方だけでなく、たまたま通りかかった一般市民にも見てもらえるという利点がある。そういった方々にJICAの事業やそれらに多くの鹿児島の人々が関わっているということを知ってもらう良い機会となったわけであるが、さらに深く理解してもらう手立てとして、パンフレットなどの配布を行えばよかったという反省点もある。

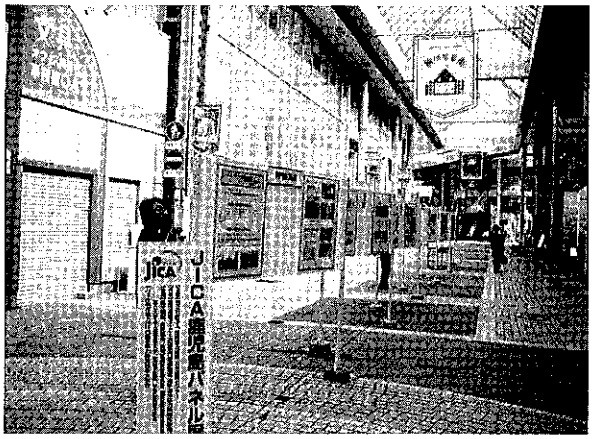
今回は新しい試みとして、海外での国際協力事業紹介だけでなく、鹿児島の特色を活かしたJICA研修員受け入れについても紹介し、県民の方々の国際協力への関心を高めることができたのではないかと思う。その一方でパネルの展示の仕方に、より工夫が必要であると感じた。特に研修員受け入れ、専門家派遣については、ボランティア活動と比較するとその内容も多岐にわたり、説明すべき事項が格段に多い。その結果写真よりも説明文が多くなってしまう。写真が大きくてインパクトが強い協力隊のパネルの方が、より人目を引いて長く足を止めていたようである。大きめの写真を掲示したり、それぞれの国に関する品物（布や小物、国旗など）を展示したりして、遠目からも「何だろう、見てみたい」と思わせる一工夫を考えていきたい。

このパネル展を通して、一般市民だけでなく、専門家連絡会会員同士の交流や、専門家と協力隊OBの交流、またこのパネル展を見にきたことがきっかけでＩターンや古い隊次のOBといったJICA関係者同士との出会いなどがあり、各団体の活性化につながる催しでもあった。

ぜひ来年度も実施し、「10月の第１土日はJICAのパネル展」と市民が認識してくれるような安定したイベントになることを期待している。

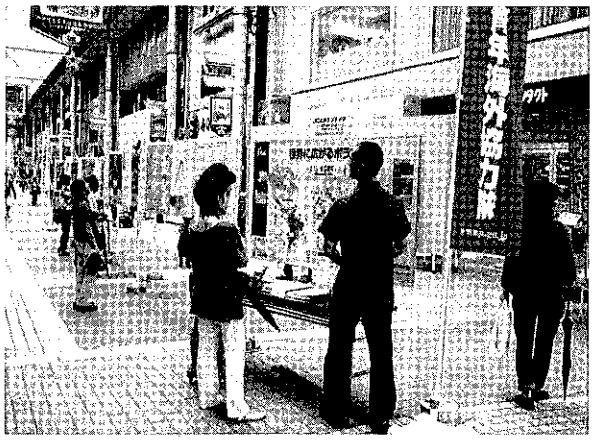
またJICAに限定した国際協力だけでなく、鹿児島県内で国際協力活動を行っている他の団体も巻き込み、一般市民が「国際協力を知る」だけでなく「国際協力に参加する」につながるような催しとなるよう計画を立てていきたい。

パネルの撮影をするＮＨＫのカメラマン
パネル展の模様は昼から夕方のニュースで報道された



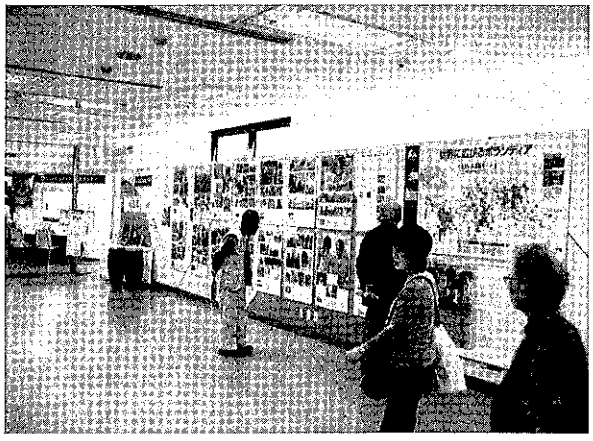
パネル展の様子
40枚のパネルが100メートルに渡り並んだ

パネルに見入る人々



質問に応じる協力隊OB

ロスポンチョスの応援



山形屋連絡通路

[redacted]

平成22年度会員活動報告

2010年インドネシア・メラピ火山への国際緊急援助隊派遣

京都大学防災研究所附属火山活動研究センター　准教授　井口　正人

筆者は2010年11月９日から16日まで国際協力機構の国際緊急援助隊としてインドネシア・ジャワ島中部のメラピ火山に派遣されたので、それについて報告する。メラピ火山は127の活火山があるインドネシアでも最も活動的な火山である。16世紀中ごろから１～数年おきに噴火が繰り返されている。山頂に溶岩ドームが形成され、それが崩落することにより頻繁に火砕流が発生する噴火活動が繰り返されてきたのである。1990年以降でも、1992、1993、1994、1995、1997、1998、2001、2006年に火砕流が発生し、火砕流は山頂から６kmの距離に達していた。2010年10月26日に始まるメラピ火山の噴火活動において最初に噴火発生の報を聞いたのは、同じくインドネシアのスマトラ島のパダン近くのタラン火山の麓にいたときである。前夜からの大雨による洪水でJakarta市内は大混乱に陥ったことが早朝から報道されていたが、前夜、スマトラ島沖のMentawai諸島において発生したM７.８の地震による津波の被害が明らかになるについて、報道内容は津波の犠牲者に変わった。そして夕方に発生したメラピ火山の爆発により、TV報道は火山噴火の状況に素早く切り替えられていった。すでに、前日には噴火警報レベルは最高の４にあげられており、山頂から10km以内のほとんどの住民は避難していた。報道機関にしてみれば満を持しての報道であったに違いない。筆者は10月31日にメラピ火山の南30kmにあるジョグジャカルタ市に入った。ときおり、火砕流は発生し、４-５kmの距離まで流下していたが、それほど危機的な状況ではなかった。ところが、火山噴火は最初の噴火開始以降に異なる推移を見せることがしばしばおこる。11月３日11時ごろからからほぼ連続的に火砕流が発生するようになり、警戒区域は山頂から15kmまで広げられた。この活動は11月５日にはさらに激化し、火砕流は南南東側のGendol川に沿って17kmの距離まで達した。警戒区域は20kmまで拡大され、約38万人の住民が避難した。死者は300人以上と発表されている。また、噴煙は高度10kmまで上昇し、

放出された火山灰は数100km離れた西ジャワまで拡散し、国際線を含む航空機の欠航も相次いだ。火砕流は溶岩ドームの崩落によるものではなく、火口から直接あふれ出たものであり、これまでのメラピ火山の火砕流の発生形態と全く異なるものであった。このような火山活動が今後どのような方向に進展するかを評価するためにインドネシア政府は日米の専門家の緊急派遣を要請した。日本からは井口正人（京都大学防災研究所）、野上健治（東京工業大学火山流体研究センター）、金子隆之（東京大学地震研究所）が国際緊急援助隊として11月９日に派遣された。派遣時は依然として噴火活動は活発であり、多量の火山灰が山頂から連続的に放出されるとともに時々火砕流も発生した。噴火活動とそれに伴う火山性微動の振幅は11月６日以降、徐々に低下しており、短期的には噴火活動は低下する方向に進むが、火山性地震活動はいまだに活発であり、火山灰の分析から10月26日の最初の爆発と11月３日以降に放出された火山灰は異なる性質を示すことから地表の火口と直接的につながった深部のマグマ溜まりからマグマが上昇してきていることが推定され、今後さらに大きい噴火に発展する可能性を否定できないと国際緊急援助隊は判断した。幸い、その後も噴火活動は低下し、12月３日に警報レベルはSiagaに引き下げられた。しかし、本格的な雨季に入り、ラハール（火山泥流）が発生し始めたことから今後は土砂災害対策も急務となってきている。

平成22年度会員活動報告

ザンビア国立ノーザン職業訓練大学校

自動車工学　稲見　廣政

活動地域及び配属先の概要

活動地域：活動先であるンドラ市（コッパーベルト州）は首都ルサカから西北に350kmに位置する。ルサカ－ンドラ間の交通移動手段として数社ある路線大型バスが早朝から運行し４.５時間かかる。職場（学校）はカンセンシ（カンセンジ）というところにあり、街の中心から路線ミニバスで15分にあり、学校周辺には郵便局、両替屋、肉、魚屋、レストラン、テークアウトの店、スーパー、ネット・カフェ、野菜市場などがあり便利で時々利用する。学校の脇をクワッチャと呼ばれる大きな通りがあり、朝、夕の通勤、帰路の時間帯は住民の足となる多くのミニバス、自家用車で渋滞する。また、排気ガスの影響を感じる。

配属先の概要：当該ノーザン職業訓練大学校（通称；ノーテック）はザンビア独立（1964年）前の1959年に民間の資金により設立されている。この種の職業訓練機関としてはザンビアトップクラスである。初期は州政府の管轄下にあったが、現在は国立技術専門学校で科学技術職業訓練省の管轄下になるも独立採算制色が強い。学部は１、自動車工学及び大型重機部　２、電気工学部　３、機械工学部　４、応用科学及び経営管理学部の４学部で構成される。学生数1200名、スタッフ135名である。

ボランティアが所属する部局の概要

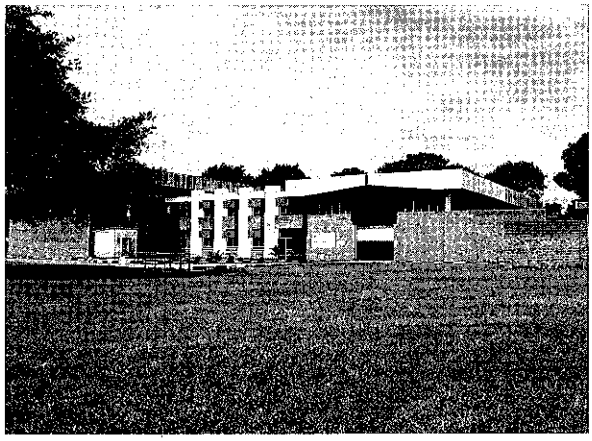
SVの所属する自動車工学／大型重機学（Automotive ／ Heavy Equipment Repair Department）は現在、自動車工学のクラスが５つ（ディプロマクラスの学生８名含む）、大型重機のクラスが５つ、合わせて10クラス、学生が270名である。所属するスタッフはヘッド・オブ・デパートメント（HOD）と呼ばれる学部長、秘書、清掃人、工具／機材管理者そしてレクチャラー（講師）と総勢16名である。講師スタッフについては経験年数、海外での教授経験（ボツワナ）もあり、現状を考慮し及第点が与えられるレベルにある。ただし電気関係、新技術に弱いところもありSVがそこをカバーすることになる。

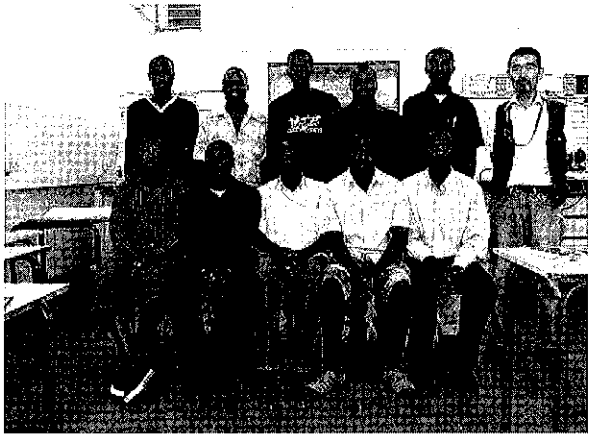
自動車を学ぶには理論はしかり、実技が大きくものを言う。自動車は日進月歩進歩し続けている。当然教える側（学校）もそれに見合う現状にあっ

た教材、機材を揃えるのが必要不可欠であるが、必要とされる教材機器、装備が10～20年前のものが大半である。しかし必要な機材は高価であり、現実としてはあるもので、ザンビアにあった教え方が優先される。

受入国の印象

任国の文化、生活習慣：一般に職場に遅く（ゆっくり）来て早く帰るとの印象があったが、当該校ではそんなこともなく早くも来るし、遅くまで仕事をしていて意外だった。２－３年ごとに契約更改がなされるのも一因だろうか。みな経験することかと思いますが、約束することと実際に実施（行動）することの違い、ギャップの大きさはその時の背景がわかれば理解できないことでもないが、疑問が残ることも確かである。物、料金に値段があってない、相手により値段が変わり、そのつど交渉ごとが多くなる。少しであるが青空マーケットなどで値札がついているのもありこの方が効率的で、経済効果大だと思うのである。人々の格差の大きさを感じる。





平成22年度「連絡会」活動報告

幹事　水上　惟文

1　活 動 名：JICA九州の活動の後方支援

(1)実施内容：シニア海外ボランティア募集説明会の案内状を鹿児島大学教員85名とポリテクカレッジ川内教職員４名に配布した。

実施時期：2010年４月

実施場所：鹿児島大学・ポリテクカレッジ川内

(2)実施内容：鹿児島大学で青年海外協力隊員募集説明会を開催した（参加者数18名）。ポスター 12枚作成。チラシ1000枚配布。

実施時期：2010年４月20日

実施場所：鹿児島大学共通教育棟２号館212号室

2　活 動 名：国際理解教育に関する授業の開講

実施内容：鹿児島大学で授業科目「国際協力論」を開講した（受講者数58名）。

実施時期：平成22年度前期（2010年４月～７月、全15回）

実施場所：鹿児島大学共通教育棟３号館322号室

3　活 動 名：パネル展の開催（JICA九州主催、青年海外協力隊鹿児島県OB会との共催）

実施内容：鹿児島県在住の専門家・青年海外協力隊員・シニア海外ボランティアおよび県内JICA研修員受入団体の活動内容をパネルにして展示した。青年海外協力隊員募集要項・シニア海外ボランティア募集要項の配布も併せて行った。

(1) 実施時期：2010年10月２～３日

実施場所：鹿児島市天文館の「ぴらもーる」通り（来場者400名）

(2)実施時期：2010年10月13～19日

実施場所：鹿児島市金生町の山形屋デパート（来場者700名）

4　活 動 名：鹿児島県JICA派遣専門家の経験活用講座「地球一周国際協力の旅」：準備中。

5　活 動 名：会報誌「NEWSLETTER」第10号の発行

実施内容：300部（例年並み）印刷した。

実施時期：2011年２月

6　活 動 名：会員名簿の作成

実施内容：会員名簿を作成した。

実施時期：2011年２月

7　活 動 名：九州各県のJICA派遣専門家連絡会との連携強化

実施内容：福岡県JICA派遣専門家連絡会との連携強化を図った。

実施時期：2011年３月５日(土)

実施場所：KKR鹿児島敬天閣

8　活 動 名：総会の開催

実施内容：総会を開催し、平成22年度活動報告、平成22年度決算報告を行い、平成23年度の活動計画案や予算案を審議した。

実施時期：2011年３月５日(土)

実施場所：KKR鹿児島敬天閣

9　活 動 名：講演会の開催

実施内容：福岡県JICA派遣専門家連絡会の代表者に講演をしてもらった。
講演者　久保倉宏一氏
講演題「福岡県JICA派遣専門家連絡会の現状」

実施時期：2011年３月５日(土)

実施場所：KKR鹿児島敬天閣

平成21年度「連絡会」総会及び講演会報告

幹事　嶽崎　俊郎

開催日時：2010年（平成22年）３月６日（土）
16：00～17：45
開催場所：KKR鹿児島敬天閣

１．総会議事

（１）開会　　司会進行　嶽崎幹事

（２）会長挨拶　志賀会長

本日は土曜日でお休みの所、年度末の中、ご参加いただきありがとうございます。今回の参加者は例年になく多彩です。JICA九州国際センターの本田市民参加協力課長、熊本県連絡会幹事の藤本吉幸先生をはじめ、来賓として、青年海外協力隊鹿児島県OB会桑山会長、鹿児島県アジア・太平洋農村研修センター（CAPIC）の酒井研修課長、それに鹿児島県青年海外協力隊を支援する会の弓場事務局長、シニア海外ボランティアOBの倉谷さんなど、形ばかりでない実質的な活動をされている方々に今回は参加をいただいております。これらの方々にご参加いただいた背景には、我々が抱えている問題、いかにして会を活性化させるかという問題があります。これからは、協力隊ＯＢ、シニアボランティアＯＢ、専門家が一体となって活動していってはどうだろうか、あるいは県の垣根を越えて活動を共にしていってはどうだろうかといったような今後の方向を模索しているところです。総会、講演会、懇親会の３部構成で例年通り開催していますが、実りある会にしたいと思います。

（３）JICA九州国際センター代表挨拶
市民参加協力課長　本田　勝氏

21年度定例総会にお招きいただきありがとうございます。本来ならば出席するはずの小林所長が先約のため、そちらの対応のため私が代わりに来ております。専門家連絡会の皆様はそれぞれの派遣国で国際協力の最前線の場で、それぞれの専門分野でキャパシティ・ディベロップメント、インスティテューショナル・ビルディングのそれぞれの諸活動に取り組んでいただいて開発途上国の経済社会のための諸活動にご尽力いただき、ご帰国後は、このような形で鹿児島県における国際協力とか開発途上国の現状についての啓発活動、国際協力への支持の理解のための諸活動に取り組んでいただいており誠にありがとうございます。またここ鹿児島県におきましては、専門家連絡会の皆様と青年海外協力隊OB会、支援する会等々の連携が濃密に展開されておりまして、昨年は、天文館で写真展（パネル展）を開催していただき、鹿児島における市民との皆様との交流の場を設けていただいていると伺っております。そういったことで、鹿児島と開発途上国をつなぐ架け橋として連絡会の皆様方の活動に対しまして、お礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、JICAを取り巻く状況は、皆様ご承知の通り、昨年度の事業仕分けで、高コスト体質と非効率な運営がされているのではないかという厳しい指摘を受けまして、現在見直し改善の取り組みを行なっている最中です。来月、４月の下旬に仕分けの第二弾が開催されますので皆様方に説明責任をもって対応させていただきたいと考えております。

来年度の技術協力関係予算は、今年度の1560億円から80億円減の1480億円で技術協力分野の事業を展開する予定になっております。ただ、開発途上国の現状とか課題を解決するために皆様にご協力いただいている国際協力事業自体は、否定されることなくそれは必要だということで、見直しと

改善をしながらよりよい国際協力事業を展開していきたいと思っておりますので、皆様方のご協力をよろしくお願いしたいと思います。

また、本日ご出席予定の衆議院議員松下先生におかれましては、「青年海外協力隊の活動を支援する国会議員の会」の立ち上げにご尽力いただいておりまして、協力隊事業の側面的な支援を中央政界において展開していただいております。

こういった形で、中央と地域がそれぞれJICAの事業にご協力いただけることに対し、私どもも皆様方と一緒にここ鹿児島におきましてもよりよい事業が展開できるように対応させていただきたいと思いますので、引き続きご指導ご協力をお願い致します。

（4）来賓挨拶

1）青年海外協力隊鹿児島県OB会会長　桑山昌洋氏

OB会を代表してひとことご挨拶致します。志賀会長の下、様々な取り組みを積極的に進められていることに対し、OB会としても心強く思っております。

さきほど、本田課長紹介の通り、昨年秋に専門家連絡会とOB会とがご一緒に活動紹介のパネル展を開催致しました。OB会のみならず専門家の方々のご協力をたくさん頂きました。おかげさまで、盛大な催しになり、一般市民の方々へ私どもの活動内容を理解していただくよい機会だったと思います。また、赴任期間中は、多くの協力隊OB、OGが色々な面で専門家の皆様方にお世話になったことと思います。任地では、その縁が浅からぬものがあったと思いますが、任地を離れ、帰国後は、なかなかそのつながりを保つことはできずにいたのではないかなと私自身反省しております。

これまで、同じ鹿児島にいながらなかなかつながりの持てなかった専門家連絡会と協力隊OB会でしたが、昨年のパネル展開催を通して交流が持てましたし、今後は、より近しい存在として共に協力ができて、途上国の経験で得られた情報を鹿児島への貢献という形で結びつけることができれば、OB会としても非常に頼もしく感じられます。専門家の先生方も多彩ですが、OBも多彩ですので色々な形で、広げていけるのではないかなと考えております。同じ国際協力の前線にたった経験者の集団として共に努力して貢献していきたいと考えております。ご協力をお願い致します。

2）鹿児島県青年海外協力隊を支援する会事務局長　弓場秋信氏

本日は、井上会長に案内をいただきましたが、不在で代理で出席しています。まずは日頃から専門家連絡会の皆様とは、色んな場面で親しくしていただいておりますことをまずはお礼申し上げます。この席に来まして、T夫妻、N先生、S先生、I先生などはじめ皆さんと会える機会を得たことは、井上会長に感謝したいなと思います。

私ども、協力隊を支援する会は、協力隊なり国際協力の経験者ではなく、そうした国際協力に関わる方々を応援しようという会で、現在154名の会員で構成されております。昨年20周年を迎え、県内の自治体、県をはじめ31自治体、10団体、25企業、約180名の個人会員の支援で運営されておりますが、ひとつには、協力隊に参加しやすい環境づくりをしようとしております。ご承知のように、協力隊に参加したくともなかなか現職参加が難しかったり、帰国後の就職問題がありますので、そういったものを支援ができないか、一人でも志を持った鹿児島の青年が、この事業に参加し開発途上国の国づくりに貢献できればとの目的を持って発足しましたが、現在は、OB会と一緒になって、留学生や先生、帰国隊員を年間45～46回県下の小中学校に派遣しています。今後そういった中に、専門家の方々にも声をかけていきたいと思っております。

また、開発途上国の現状とか国際協力とはどういったものかというものを中高生にも知っていただくために、過去19回ほど派遣していまして、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、来年は再びインドネシアのスラベシ島に派遣を考えています。この事業は、（子供達が）現地で一人ずつホームステイしますが、なかなか受入現場の発掘に時間がかかります。できればインドネシア、それが不可能ならカンボジアへの派遣を考えているところです。そういった色んな事業を通じて、一人でも多くの地球市民が誕生したなら、協力隊支援以外の活動としてうれしいなと思っています。本日は、皆様方から色んなご意見を頂きながら私共の活動に取り入れていきたいと思います。一緒に、All　JICAの一員として何かそうい

う形で活動ができればと思っています。ひとつどうぞよろしくお願い致します。

3）鹿児島県アジア・太平洋農村研修センター（CAPIC）　研修課長　酒井マリ氏

実は、以前JICAの推進員をやっていまして、その時は、毎回専門家連絡会の会議に出席させて頂いていまして、今日は、久しぶりに先生方のなつかしい顔を拝見できましてとてもうれしく思っております。私は現在、鹿児島県の施設で、「アジア・太平洋農村研修センター」におります。皆様のもとへもパンフレットを配布させていただいております。鹿児島県の施設なのですが、平成18年から県の指定管理ということで、私どもの青年海外協力隊OB会による団体が管理運営をしています。従いましてスタッフ全員が協力隊OBで、現在は常勤４名、アルバイト２名でやっております。センターの活動におきましては、アドバイザの先生方がいらっしゃるのですが、志賀先生にも引き受けていただいて、いつも貴重なご意見を頂いております。

鹿児島県の国際交流の拠点として大隅半島のすごい山奥にあるのですが、どんな活動をしているかといいますと、国際交流のイベントや外国人研修生の受入などの国際協力関係、そして最近は地域起こしにも取り組んでおります。特にJICA関係の事業として、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアに関心のある方々を集めて年に一度、一泊二日の研修会を行なっています。それからJICA研修生の受入も、農業、環境、地域起こしとか不定期ですがそうしたことを私どものセンターに滞在しながら鹿児島のことを色々学んでいます。２年前は、嶽崎先生の所で、離島へき地医療関係の研修生がお世話になりました。

それから、今年度から、協力隊（試験）に合格して派遣前訓練が始まる少し前に、「村落開発普及員」の職種があるのですが、途上国で村起こしをする若者達に、そういった経験の余りない人のための研修をやっていまして、すでに11月と２月の２回実施し、まずは大隅半島のすごい田舎の村で日本の農村を体験してもらって農村のことを理解した上で、海外へ行ってもらう趣旨でやりまして若者達もたくさん鹿児島の田舎から学んだと共に、地域の方々も少子高齢化が進んでいますので、若者達が村に来てくれたととても喜ばれております。あと、施設自体は、70名ほどが宿泊できる大変立派な宿泊施設を備えた研修センターです。色々な団体にもご利用頂けます。大学関係も教育学部、農学部の学生さんのゼミでもご利用いただいています。一般の方々にも是非ご活用いただければと思います。専門家の先生方とは、今後も色々な形で連携して事業を進めていきたいと考えております。まだまだどうしても協力隊OBとのつながりが深い状況ですので、今日は色々な先生方とお会いして勉強させていただきたいなと思っております。

4）シニア海外ボランティアＯＢ　倉谷重嗣氏

私の専門は通信工学、マイクロウエーブでして、フィジーの2006年の放送公社の支援で参りました。そこにおられるSさんとは前後しております。また昭和57年、58年には鹿児島大学での工学部、水産学部の一部学生に非常勤講師をいたしました。アナログ全盛時代でした。ただいまは、ディジサポ鹿児島で地デジの普及の応援をやっております。２月13日に放送大学の異文化研究会の15名くらいのグループに呼ばれ、（シニア）協力隊で私の撮影した２時間のビデオを放映し、昼休みも食べながら議論して、午後からは「変革といかす」のテーマで事前にレポート提出させてディベート方式でやりましたが、最高齢86歳の一番元気なおばあちゃんもおられ、こうした教育が今の若者に必要だなと感じました。そこで皆さんが言ったことが、国語の問題もありましたが、日本の若者が元気がないということをおっしゃっていました。私もアメリカに（NHK）現役の頃、出張して、向こうの商社マンから言われたことが日本の若者は勉強しない、韓国、中国、インド学生は猛烈に勉強するという話を聞きまして、まさにそれが今度のオリンピックにも表れたのではないかと思います。

昭和30年に玉龍高校におりましたが、ここに名物校長がいまして、生徒が嫌がるトイレ掃除を率先してやり、新聞紙でウンチの処理をしたりしてました。校門にはホウキ持って立っていて、遅れてくる生徒を怒鳴りつけるんですが、目は笑っているというそんな校長が当時は非常に多かったのですが、最近は、４校くらい私の体験を話したいと言ったのですが悉く受け付けない、校長は、３年くらい何とかしてればいいやという保身的な感

じがしました。教育長にもそのことを言ったことがあります。玉龍のＩ校長は、東京から英、数、国、理の優秀な先生を引っ張ってきて、ペトロという優秀な英語の先生もいまして学力の向上がみるみるうちに図られ、そうしますと（野球も）甲子園に行きましてね。今は、校長の指導性は全くないのではないかと、挨拶もどこへ行ってもつまらないなと感じます。今日は県外から藤本さんが来られていますが、大変これはいいことで、私のとこにも東京、宮崎、名古屋から（元協力隊の人たちが）10日間私の家にいました。ともかく海外で知り合った気心知れた連中と交流する、県外の人との交流は非常にいいことだと思います。

（５）議事

１）役員選出　（志賀会長）

NEWSLETTERの裏面に、発足時からの申し合わせ事項がありますが、第４項に会長と幹事の任期２年が定められております。今期は、改選を迎えます。配布の歴代役員一覧の裏もご覧下さい。役員会で協議した結果、会長は留任、以下の幹事は長年やってこられたということで、退任されます。嶽崎、馴田幹事は留任で調整しました。

退任　児玉　憲雄氏（経験活用担当）７年
　　大富　　潤氏（会計担当）７年
後任　水上　惟文氏（経験活用担当）
　　中畑　勝見氏（会計担当）

昨夜メールで、顧問のJICA九州小林所長が転勤で東京へ転勤との知らせを受けました、後任に村岡敬一氏が４月から赴任します。ご意見なければ承認いただきたいと思います（拍手で承認）。

２）平成21年度活動報告（志賀会長）

○JICA九州の後方支援
○国際理解教育に関する授業の開講
○パネル展開催
○経験活用の事業
○会報誌「NEWSLETTER」第９号の発行
○会員名簿の作成
○九州各県の連絡会との連携強化

３）平成22年度活動計画（志賀会長）

まだ具体的に何をやるということを話し合っていないが、従来通りの活動をすることになるであろうと思います。昨年はパネル展をやりましたが、まだ何も話し合っていませんが、私の気持ちとしては、せっかく去年やったし、出品者を変えてまた実施できればいいなと個人的には思っております。毎年８月頃にJICA九州に計画を提出しますので、それまでに会員の方々のご意見を集約しながら、幹事会で検討していきます。

４）会計報告　大富幹事（詳細は、同封の資料参照）

平成20年度経費内訳報告、予算総額23万８千６百円、実績18万２千７百41円でした。差額の５万５千円余りをJICAに返納しました。

平成21年度予算についてですが、今年度は、パネル展開催の関係で31万4700円の規模に膨らんでいます。

平成22年予算は、８月頃に申請となります。引き続き志賀会長、会員の方々のご意見をお聞きして、作成してまいります（平成20年度報告を拍手で了承）。

この場での説明は、これまでの経費内訳を、年度途中の報告になりますが、パネル展開催経費約15万９千円、NEWSLETTER ９号の発行約８万円弱、今日の総会、会員への発送作業を終えた段階で、確定します（20年度決算報告を拍手で了承）。

５）その他

鹿児島大学の学内事情により、事務局を移転、電話やFAXは、志賀会長に直接伝わるようになっています。以下、新事務局の住所等

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会事務局
〒890-0065　鹿児島市郡元一丁目21-30
鹿児島大学法文学部　志賀研究室内
電話：099-285-8950
FAX：099-285-8861
E-mail：shiga@leh.kagoshima-u.ac.jp

２．講演

16：55～17：40　司会　馴田幹事
講師：藤本　吉幸氏（熊本県JICA派遣専門家連絡会幹事）
演題：熊本県JICA派遣専門家連絡会の紹介
講師紹介（志賀会長）

配布資料の講演記録と「緑色長城」をご覧下さい。藤本氏は、財団法人　林業科学技術振興所の研究員をされ、中国林業科学研究院　林業研究所の客員教授をされました。JICAプロジェクト「遼夏森林保護研究計画」事業で短期派遣４回の経験をされています。ご専門は、林木育種です。

講演内容

お招きいただきありがとうございます。本来は、赤木会長が来るはずだったのですが、２月中旬から今月いっぱいブラジルへの出張で来られなくなりました。会長からは、くれぐれもよろしくとのことです。赤木会長は、水銀の専門家で、生まれは、中国東北地方（満州）、鹿児島の枕崎出身です。今は水俣在住で、年２回ほど海外へ行き、カザフスタンとかブラジルへ行っております。

これから熊本県の現状をお話ししますが、設立は鹿児島の方が先輩で、１年早い。先輩の鹿児島の皆さんに熊本の現状をお話ししても余り大して参考にはならないかも知れません。概要は、NEWSLETTERSのNo.９に書いてあることを見れば事足りるのですが、私どもが出しています会報は、鹿児島のような立派なものではなく、全部手作りで、今年は８頁ですが、例年は、裏表で６頁くらいのものです。１，２部はコピーして来ましたので参考にして下さい。設立は、そういうことで熊本が後です。熊本には会則はなく、申し合わせ事項も、１から３まではこちらと一緒で、４の役員体制が会長１名、幹事２名になっています。実質は３名の幹事で、会長が水俣在住で水銀ラボをやっているものですから特殊事情で手元に一人いなければということです。

熊本県連絡会は、（役員が）比較的長期間にわたってやっています。初代会長は、２年ほど前に亡くなられた尾上先生、先生は熊本大学医学部ご退職後は、ワクチンなどを作っている化血研の顧問をされましたけれども（会長を）４年、その後２代目は、熊本大学工学部の醸造の専門の園田会長が９年、今の赤木会長が今年で６年目になります。幹事も結構同じ方が長くやっていまして、熊本保健科学大学学長小野先生、この方は皮膚科ご専門です。また吉永さんという水質がご専門の熊本県職員をなさっていた方で、退職後も幹事を続けてなさっています。私も５、６年やっています。その前に、運営委員というものがありまして、幹事のサポートをする方がいたりいなかったりなのですが、今は２名います。申し合わせ事項では若干名ですが、今は運営委員も役員ということで、会長、幹事、運営委員の三者で協議をして連絡会の運営をしております。

長くやっているということを話ししましたが、熊本は、若い人が定着しないといいますか、大学が７つか８つあり、高専や国公私立の研究所（今は独立行政法人）がいくつかあります。例えば、農林水産省、林野庁の機関で「林業総合研究所」、九州沖縄の旧農業試験所、水俣病の国水研（？）赤木会長が国際部長をされていた所ですが、自ら立ち上げた水銀ラボなどがあります。こうした機関に行政から派遣された若い人は転勤が多く、定着率は高くないのです。私は1930年生まれで、今も幹事をしています。今申し上げましたように出先機関が多いものですから、入れ替わりが激しくても３年から４年いる方にもなるべく（連絡会に）はいってもらうようにしています。

主な活動としては、総会、手作りの会報の発行、総会の時に、帰国専門家２名の講演をお願いしています。専門分野が多彩で、面白いといっては何ですが、お互い専門分野が違うと素人ですから思いがけない視点からの意見もありとても（総会にあわせての）講演はいいものではないかと思っています。講演の要旨は、会報に掲載しています。

私は森林の樹木の遺伝、育種が専門ですので、そういった立場でお話をしたのが、先ほどの「緑色長城」であります。それぞれの専門分野、任国で大変バラエティに富んでいます。会報は、関係機関にお届けしています。また、関係諸団体との連携、事業参加を掲げています。21年度は１月27日に熊本大学の国際センター開所式がありまして、それに参加致しました。連絡会の総会は、毎年１月最終週の土曜日を定例化しています。その時には、総会と講演会を行います。熊本市の国際交流会館が熊本でのイベントの拠点になりますが、JICA熊本デスクもその中にあります。総会も１/30そこで行ないました。３/26、27開催予定のSAKURA祭りも、国際交流会館で、開催されます。熊本県国際協会が主な主催で、連絡会もそれに協力するという形で行います。何年か前には、鹿児島でもおやりになったパネル展を行ないました。外国から来ている研修生も参加して、民族衣装の展示、芸能の発表会、武道などの演武会などをやっております。今年は、パネルディスカッションをやる予定で私が話をすることになっていまして、何人かのパネラーもお願いしてやることになっています。５月の国際協会総会にも参加しています。

それから、熊本市民講座が6/27（赤木会員）、11/28(石島?会員)と専門分野の異なる任国の色々な技術移転の話し等をしております。また、タンザニアの緑化支援、色んな国の活動報告が散発的にありますが、連絡があり次第、参加できる人は参加するという形をとっています。青年海外協力隊ともわりに密に連絡をとっていまして、12/12の帰国報告会にも私は初めて出席したのですが、6～7人がすばらしい報告をされました。もったいないから何かペーパーにまとめたらということを申し上げました。また12/16には、5名の任国赴任の壮行会にも参加しました。

最後に、今後の目標、課題なのですが、個人情報保護法との関係もあって、誰がどこからいつ帰ってきたという情報がなかなかわかりにくく困っております。今の所、会員のネットワークで何とかカバーしています。さきほどお話ししましたように、大学、高専、研究所の派遣専門家にも帰国後連絡会にはいっていただくように、働きかけてはおります。ただ若手はそれほど目に見えて増えるわけではありませんが、各機関のOB、OGがそのまま居ついてしまうといいますか、私もそうなのですが、私は個人的な話になりますが、松喰い虫の抵抗性の育種を西日本の14県と国立の3機関の17機関でやるということになって、その技術的な総括をいたしまして、その頃、農林省林業試験場から、九州林木種場という所に赴任し、今から30年以上前、鹿児島のイモ焼酎「白波」で歓迎会がありました。これは、すごい飲まされるなと思って、それからトレーニングにトレーニングを重ねて、今はだいぶ上達致しました。熊本は米焼酎の産地なのですが、その頃は、どういうわけかイモ焼酎の方が主流でした。そちらの研究をリードされているのが、2代目会長の園田先生で中国などにも行っていらっしゃいます。定年退職後にOB、OGがそのまま（熊本に）定住してしまう人が結構多いのですね。ですからそういう面では、若い人が転勤で流動的に動いていって、（連絡会は）オジイ連中でもう少しがんばろうかということです。お隣でありながらなかなか鹿児島県と一緒に何かをするチャンスは今までは少なかった。これからはこれをご縁に、ご指導いただきたい。会報にも書きましたが、色んな関係団体との連携を一層密にして、その結果が「途上国援助経験の社会還元を含む国際協力に関する市民の理解促進活動」という連絡会の主たる機能に結実するように会員一人一人が研鑽と協調、普及活動に努めています。どうぞこれから熊本県の連絡会とも仲良くおつきあいいただきたいと思います。

質疑

Q：中国の森林の砂漠化は今も進んでいるのでしょうね？

A：福建省やハルピン林業大学に行ってたりしておりますけれども、北と南は、比較的森林は今でも豊かな所が多く、緑化に相当力を入れております。「緑色長城」にも書きましたが、中国では砂漠は、水が少ないという意味の「沙漠」と書くのですが、楊樹は、ポプラのことです。砂漠化を防ぐために無性繁殖（クローン繁殖）の挿し木で増えるポプラを植えましたが、遺伝的に同じなものですから、一本が虫に食われるとカキキリ虫(天牛）に弱いので全滅してしまう危険が多いんです。最初選ばれた品種が悪かったためにこういうことになってしまうのです。福建省などでは、馬尻ショー（?)、杉の木と書いて「サンムー」というのですがこれは、日本の杉と少し違う同じ属なのですが、クリプトメリア・フォウチュネイというのを主体に植林が進められております。

Q：中国の黄砂にはまいりますね。早く緑化してもらいたいのですが、日本は大被害ですよね。

A：なかなか成果が上がらなくて申し訳ないと思います。(笑)

黄砂には色んなものがくっついてきますしね。

Q：中国には、はげ山が多い。植林がうまくいく所とうまくいかない所とあるように見えるのですがどうしてでしょうか？

A：あれは、種をヘリで撒くのです。色んなやり方でやりますが、本当はだんごにして、赤土なんかに有機質のあるものを混ぜて、そのだんごの中に種を入れる方法が一番いいのですが、ご存じのように、中国の土壌は質的によくないんです。アルカリ性が非常に強く、いっぺん雨が降ると、上にあがってきますと真っ白になって塩田みたいになってしまう、そういうアルカリ土壌の所がありますね。そういう所ではただ種を捲いてもなかなかうまくいかないんじゃないかと思います。ここに林学が専門の方がいらっしゃいますか？

(会長：会員にはいませんね)

林木育種をやっていた鹿児島大学の出身でTという人がいて、去年定年退職してこちらにいますが、こんな話があって君は来るかと言ったら、いやはいっていないと言うから、入ればいいんじゃないかと言ったんですがね。なかなか私どもの連絡会もそうですが、もう少しその魅力がないのかなと反省はしているんですが、まあどんなふうにしたらうまくいくかご教授いただきたいものです。

Q：熊本市市民講座のお話の内容はどのようなものでしょうか？

A：熊本市の事業として去年から始まったもので、連絡会からお話をしてもらえないかとの話がありました。これからもあるとは思います。

志賀：市民講座の件は、我々にも参考になるなと思いました。これだけのメンバーが揃っていますので、我々の経験を市民に還元するという当初の目的を、これなら十分達せられるなと思った次第です。今、熊本の話を伺って、悩みは鹿児島と同じかなという印象を受けましたね。高齢化が進んでいるとか、帰国専門家の情報がないものですからメンバーが固定化してしまうそういう問題を抱えています。もう少し新しい人が入ってくれば、会も活性化すると思うんですね。最後におっしゃいました隣県同士ながら交流はない、今後は何か共同でやっていければいいなということには同感です。赤木会長ともこの間電話でお話ししまして、ぜひ機会があればやっていきたいという話をしました。

Q：九州国際センターとして何かお考えはありますか？

本田課長：地域連携活動のアイデアがあれば頂きたいと思います。また、帰国専門家の情報提供については、現実には各県の連絡会の皆様と同様に問題認識を持っています。帰国真近の専門家には、JICAから専門家連絡会の情報を伝えていますし、改善できるところは、やっていきたいと思います。

K：個人情報保護法に関連してですが、鹿児島のシニアOBの名簿を集めようとしましたが、全く本部も出さないですね。また、フィジーでビデオ撮影したんですが、それをNHKで放映しようとして肖像権の問題で、JICA本部に勤務のKさんの承諾の連絡をとろうとしたことがあったのですが、ものすごくガードが固くて、最終的には会えたのですが、余りにも防御しすぎるのではないかと思います。

本田：国民の税金で運営するということでそうなっているかも知れませんが、私個人の意見ですが余り防御する必要もないかなとは思いますね。

志賀：時間も来ておりますが、ひとつだけご紹介します。CAPICのアドバイザ会議の３回目に参加して大変参考になりました。まさに県を越えたそれなんですね。センターの設立というのは、NPO法人資格をとって活動しているんです。その資格をとるために、鹿児島県の協力隊OBだけでは力量が足りないということで、九州のOB会が結束してそのセンターの運営資金を得た。それを聞いてびっくりしてすごい進んでいるなと思いました。私も毎回楽しみながらアドバイザ会議に出させていただいていますが毎回得るものがたくさんあります。今回は、そういうことを勉強させていただき何か生かしたいなと思いました。藤本先生の県を越えた活動ということでは、大変参考になるなと思った次第です。

弓場：実はCAPICは、OB会の中で県にプロポーザルを出した時に、財政基盤が弱いということがひっかかりまして、財政基盤の確立した社団法人、全国のOB会組織を入れることによって任意団体の部分をカバーできたというのがありました。

汐月：実は長いこと鹿児島県連絡会に出させていただいています。個人的な事情で、熊本県の郷里で事件があり、家が壊されたものですから郷里（人吉）に帰りました。毎回、出てまいりまして、今回くしくも熊本県の連絡会から来ておられ、先ほどそちらにも参加してくれとのお話がありましたが、個人的にもそちらへも参加したい。ここを抜けるつもりはないのですが、二足のわらじというわけで、専門家とシニア（SV）でも二足のわらじなのですね。（ツッコミ：両輪駆動ですねの声）倉谷さんとも個人的にも親しいのですが、彼の話もぜひ皆さん聞いて欲しいと思います。

（拍手で終了）

シニア海外ボランティア
日系社会シニア・ボランティア 募集

教職員、地方公務員等が所属先に身分を置いたまま参加する場合、
JICAから所属先に人件費の補填があります。
無職の方が参加する場合は、国内積立金が支給されます。
詳しく知りたい方は、募集説明会に参加してください。

年　齢 40～69歳

派遣期間 シニア海外ボランティア　1年間または2年間
短期(1～10ヶ月)もあります

日系社会シニア・ボランティア　原則2年間

シニア海外ボランティア 春募集の説明会

日　時:平成23年4月9日(土)14:00～16:00
会　場:かごしま県民交流センター
東棟　中研修室第1

募集は、春と秋に年2回あります。

お問い合わせ

JICA九州
電話　093-671-6311（代表）
E-mail　jicakic@jica.go.jp

JICAデスク鹿児島
(鹿児島県国際交流協会内)
電話　099-221-6624
E-mail　jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

（平成15年２月28日）

１．趣　旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、もてる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

２．事　業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

(1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言

(2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等

(3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動

(4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

３．会　員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

４．会長及び幹事

(1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長１名および世話役として幹事４名を置く。

(2)会長は会務を総括し、会を代表する。

(3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第２項に定める会務の執行に当る。

(4)会長及び幹事の任期は２年とする。但し、再任は妨げない。

(5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。

(6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理を行う。

５．その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

編集後記

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報第10号をお届けします。

昨年度に続いて今年度も、これまでの派遣実績を広報紹介するパネル展（JICA九州主催）を青年海外協力隊等との連携で行いました。青年海外協力隊とシニア・ボランティアの募集活動も兼ねて行いましたので有意義な取り組みになったと思います。

（事務局）

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報　第10号
発　行　2011年２月
発行者　鹿児島県JICA派遣専門家連絡会　会長　志賀美英
〒890-0065　鹿児島市郡元１-21-30　鹿児島大学法文学部
電話：099-285-8950（直通）　Fax：099-285-8861
E-mail：shiga@leh.kagoshima-u.ac.jp